

経済学者の思想

1. 古典派経済学

◎ アダム・スミス (英、1723-90) ……主著『諸国民の富』(1776)

『道徳感情論』(1759) ……1751年以來のグラスゴー大学での講義内容を公刊。

キリスト教のもとでは徳と見なされていなかった利己心・虚栄心を分析
公平な観察者の 共感・同情 (sympathy) が得られる範囲内で
利己的行為は是認される。(=フェアプレイ)

利己心……儉約・勤勉・分別・注意深さなどの徳の動機として位置づけ
虚栄心……「注目されていないと感じることは、最も強烈な希望を挫く」
→尊敬・賞賛を得たいという心は、実力・実績が伴えば「良い物」の1つ

※自由放任主義経済、「神の見えざる手」 →資本主義経済の基礎

※労働価値論 ……リカードをへてマルクスへ

商品 = 労働生産物……すなわち自然物に人間の労働が加えられたもの
労働者が生み出した価値 - 賃金 = 剰余価値
この剰余価値を資本家が搾取している、とマルクスが指摘

2. 社会主義

基本は、経済における「資本主義」に対立する概念

20世紀に、社会主義経済政策をとった国々では政治的自由がなかったため、
「自由主義」に対立する言葉として使用されたが、厳密にはおかしい。

- ・資本主義の弊害は、「生産手段の私有」が根本原因である、と考える。
- ・資本・土地など「生産手段の共有」によって、生産における無政府状態(=自由放任)を脱却し、資本家(ブルジョワジー)と労働者(プロレタリアート)の対立を解消しようとする。

(1). 空想的社会主義 (Utopian Socialism)

社会主義実現の手段が、具体性を欠いている(道徳に期待 etc)として
マルクスらから批判されて、このように呼ばれた。

◎ロバート・オーウェン(英、1771-1858) ……紡績工場支配人

厚生施設の拡充など労働者への福祉に力を入れる
アメリカに渡り、ニューハーモニー村を建設するが失敗。

◎サン・シモン(仏、1760-1825) ……科学者・資本家・労働者が協力する純粋産業社会

◎フーリエ(仏、1772-1837) ……農業中心の生活共同体「ファランジュ」

(2). 科学的社会主義 (Wissenschaftlicher Sozialismus)

◎ マルクス (独、ユダヤ系、1818-83)

◎ エンゲルス (独、1820-95、富裕な工場主の子、終生マルクスを援助)

マルクスの主著

『共産党宣言』(1848、エンゲルスと共著)

…「万国の労働者よ、団結せよ！」

『経済学批判』(1859)

…下部構造が上部構造を規定する

『資本論』(1867 第1巻、第2巻以後はエンゲルスが遺稿整理して発表)

…資本主義経済の詳細な分析

- ・唯物論を基礎に社会を考察する
理性・意識などではなく、物質(→それを生み出す経済)中心で
 - ・弁証法(ヘーゲル)を、階級対立・革命と組み合わせて歴史を考察
- ↓

◆ 唯物史観 (史的唯物論)

下部構造 ……物質を生み出す経済のしくみ

(Basis)

①自然条件、②生産手段、③生産関係

生産関係(労働者 vs 資本家)と生産力増大の矛盾が

歴史の展開の原動力である

上部構造 ……哲学・道徳・芸術・宗教・法律・政治制度

(Überbau)

上部構造は下部構造によって規定される

(上部構造から下部構造への反作用もあるが…)

◆ 疎外 (Entfremdung)

- ・労働からの疎外……自らの労働力が商品化されている。
- ・商品(生産物)からの疎外……自らが作ったモノが自分のものではない。

↓

このような中で労働者は、働く目的や生きがいを奪われ、

- ・類的存在からの疎外……社会的なつながりを失い、
- ・人間からの疎外……自分本来のあり方から離れていく。

◎ フォイエルバッハ (1804-72、ヘーゲル左派) ……キリスト教を唯物論から批判

「神が人間を作ったのではなく、人間が神を作った」

「存在が認識を規定する」

→マルクスに影響を与えた人物として有名

フランス革命後の保守反動期を脱し、自由と民主主義の時代への新たな第一歩になる

◎ ベンサム (1748 ~ 1832) 著書『道徳および立法の諸原理序説』

- ・ 人間は快楽・幸福を追求し、苦痛・不幸を避ける傾向がある、ということ肯定
→ より多くの幸福をもたらす行為が善、より多くの不幸をもたらす行為が悪である
快楽計算 ……快楽の量は、測定・計算・比較することが可能
- ・ ただし、快楽追求が道徳的であるためには、他者の幸福を配慮する必要がある
→ 功利の原理 (the principle of utility)
できるだけ多くの人が、できるだけ多くの幸福を得られるようにすること
= “最大多数の最大幸福 (the greatest happiness of the greatest number)”
- ・ 4つの 制裁 (サンクション) ……「最大多数の最大幸福」を目指さない者への制裁
 - ①. 物理的 (自然的) 制裁 ……自分の健康にも害がある
 - ②. 政治的制裁 ……法に触れたことによる逮捕など
 - ③. 道徳的制裁 ……他人からの非難を受ける
 - ④. 宗教的制裁 ……神からの罰

※しかし功利 (utility) = “使える” ということ

個人を、最大幸福実現のための“道具” “少数者の不幸も仕方がない” と考える思想
→これがカントに批判される (1785「道徳形而上学原論」)

◎ J. S. ミル (1806 ~ 73) 著書『功利主義』『自由論』

※ベンサムとの相違点

- ①. 幸福は計算できない。
 - ②. 量ではなく質が重要 ……精神的な幸福 (質的功利主義)
 - ③. 制裁についても、内的制裁だけで十分
- ・ “満足した 豚 よりも不満足な 人間 である方がよく、
満足した 愚か者 であるよりも 不満足なソクラテス の方がよい”
 - ・ イエスの “黄金律” (the golden rule) を理想視
「何事でも人からして欲しいと思うことは、他人へもそのようにしなさい」

※しかし“質”の上下を決める基準は？

「質を重視したことでミルは功利主義の枠からはみ出てしまった (M・サンデル)」

※「自由論」 ……他者に害を及ぼさなければ個性を自由に発揮できる。 (危害原則)
“自由な議論の中で真理に近づいていく” そのための思想表現の自由

産業革命の進展など、近現代における政治経済機構の巨大化による個人の社会への埋没＝人間疎外という状況に対し、主体性・創造性の回復をめざす。

有神論的実存主義……キルケゴール、ヤスパース

無神論的実存主義……ニーチェ、ハイデガー、サルトル

◎ キルケゴール (デンマーク、1813～55)

著書『あれかこれか』(1843)

「あれかこれか」の二者択一の末に、自らのあり方を自らの全人格をかけて決断する主体的実存を説く

23歳の時の日記

「私に欠けているのは、何を認識すべきかということではない。

何をなすべきかということが自分にはっきりしていないことだ。

大切なのは“私にとって真理であるような真理”を見出すことだ。

いわゆる客観的真理を私が探し出したとしても、それが私に何の役に立つだろう」

→ 主体的真理

“実存”……「個別的・具体的・主体的な私」の本来のあり方

・実存の3段階

第1段階…… 美的実存 (ästhetische Existenz)

「あれもこれも」と欲望のままに享樂的に生きる

→ 退屈・空しさを覚えて挫折し次の段階へ

第2段階…… 倫理的実存 (ethische Existenz)

「あれかこれか」と、理性によって理想を追求する

→ 有限の個人は、理想を実現できない、と挫折

第3段階…… 宗教的実存 (religiöse Existenz)

「おそれとおののき」をもって、単独者として神の前に立つ

自分の前にある神が本当の神かどうかは確かめようがない。

ただ決断するしかない。

不安を抱きながらも信仰をもって生きる、という最後の決断

↓

・現代は、熟慮が情熱に優先し、水平化・平均化された分別の時代である。
誰もがどうすべきか知っていながら、誰一人行動しようとしなない。

・実存の危機……絶望＝「死に至る病」＝本来の自分を見失った状態

◎ ニーチェ (独、1844 ~ 1900)

著書『ツァラトゥストラはかく語りき』『力への意志』

◆キリスト教道徳は“奴隷道徳”だ！

その背後には、弱者の“ルサンチマン” (ressentiment、怨恨) がある

本来、あらゆる生き物にとっては力強く生きることこそ善であり真である。

キリスト教はその生命本来のあり方を抑圧してきた。

神の前では全ての魂は平等となったが、これこそ全ての価値評価のうち最も危険なものである。……この普遍的な人間愛が、実際には全ての苦悩する者、できそこないの者、退化した者どもの優遇なのだ。

19世紀におけるキリスト教の没落によって、神が支えていた人生の意味を見失い、刹那的な享楽や絶望に逃避する風潮 → “受動的ニヒリズム”として批判



◆ ニヒリズム (nihilism、虚無主義)

彼が説いたのは能動的ニヒリズム

『神は死んだ！』 = だから、人生に意味はない

(それを支えてくれる神がないから)



◆ 超人 (Übermensch) として生きよ！”

意味のない人生を、“力への意志”を持って力強く生きよ！

// (Wille zur Macht)

※ 永劫回帰

世界は永遠に繰り返す円環運動である。

人間の人生もまた無意味なまま繰り返される。



- 運命愛 ……その無意味な人生を、「これが人生か、さればもう一度！」と運命として受けとめ肯定せよ

※人間の精神の3様の变化

第1段階「ラクダ」

キリスト教などの伝統的権威が命ずる「汝為すべし」に服従

第2段階「ライオン」

自由な精神「われ欲す」に従い、自己を束縛する価値観に反抗

第3段階「こども」

自ずから転がる車輪のように、無意味なままに永劫回帰する世界を肯定し、ありのままの無垢な存在の世界に遊ぶ。

◎ ヤスパース (独、1883 ~ 1969) 著書『哲学』『理性と実存』

- ・現代は、すべてが平均化・画一化され、無力化され、手段化した時代である。

↓

- ・そのような中で、人間にとって決定的な岐路になるのが 限界状況
= 死、苦しみ、争い、罪 etc.

→ここで挫折し、“自己の有限性”と“超越者の存在”とを自覚する。

超越者に対し、自己の人生の意味を問わずにはいられなくなる。=有神論

- ・ 実存的交わり (=「愛しながらの戦い」)
かけがえのない自己と、同じくかけがえのない他者との真剣な交わり

※ヤスパースの妻はユダヤ人であったため、ナチス政権下で離婚を求められたが拒否。

そのため1937年にハイデルベルク大学の教授職を追放された。

戦後、復帰して大学の復興に尽力。ナチスに対して消極的な抵抗しかできなかったことを

反省し、戦争責任問題を誠実に受けとめ、世界平和・核兵器廃絶などに積極的に発言した。

◎ ハイデガー (独、1889 ~ 1976) 著書『存在と時間』

- ・人間は、自己のあり方を自覚する存在 (現存在、Dasein) である。
- ・また、常に他者や事物と関わり、それらに配慮しながらの存在でもある。
= 世界-内-存在 (In - der - Welt - sein)
世界の中に投げ出された状態 (被投性 Geworfenheit)
- ・人間は「時間的な存在」である。=常に将来を考えながら今を生きている。
→将来の将来の将来は...「死」である。
=つまり、人間は「死への存在」(Sein zum Tode) である。
- ・しかし我々は通常は、死を意識せず、日常に埋没して生きている。(=頹落)
本来の自己 (死に向かう存在だということ) から逃げている。(=存在忘却)
↓
- ・そのような存在...「ひと」、ドイツ語では「das Man、ダス・マン」

ドイツ語では、「人間・人類 = Mensch」、「(男の) 人 = Mann」である。

これに対しドイツ語の「man」は不定代名詞で、「誰かさん」というような意味である。

ハイデガーはこの単語に、定冠詞 das (= the) をつけて大文字で始めることにより

「ある一人の誰かさん」といった意味の新たな熟語を作ったのである。

= das Man として何となく生きているだけでは「本当の自分」ではない、ということ。

※ハイデガーは、1933年、フライブルク大学総長になり、ナチスに入党した。

戦後は1951年まで教職活動を禁止されていた。(復職にはヤスパースも協力)

◎ サルトル (仏、1905～80) 著書『実存主義とは何か』

第2次世界大戦でドイツ軍の捕虜となるが脱走。ナチスへの抵抗運動(レジスタンス)に参加。戦後まもなくして行った講演が上記『実存主義とは何か』である。

◆人間の 実存は本質に先立つ (Existence precedes essence.)

例えば、道具は、道具の制作者の頭の中にある「道具の本質・目的・定義」に基づいて制作され、そして存在するようになる。

(=本質が先で、存在が後)

しかし「人間を作った神」は存在しない。

よって人間を作るのは「すでに存在している人間」自身である。

実存主義の考える人間が定義不可能であるのは、人間は最初は何者でもないからである。人間は、後になって初めて人間になるのであり、**人間は、自らが作ったところのものになる**のである。このように、人間の本性は存在しない。その本性を考える神が存在しないからである。

※ **投企** ……本来的自己に向かって自分自身を投げ入れる

ハイデッガーが提唱し、サルトルにも受け継がれた

※人間は「**対自存在**」

常に自己を意識し、未来に向かって新しい自己を形成しようとする

⇔ 事物はそれ自体で存する「**即自存在**」

◆人間は**自由**に自らを選択できるが、その 責任 も自分で負わなくてはならない。

そこに**孤独・不安**がある。しかしそれが**自由**であることの証拠とも言える。

もし神が存在しないなら、全てが許される。従って人間は孤独である。なぜなら、すがりつくべき何者をも見いだし得ないからである。……

人間は 自由 である。……

我々は逃げ口上もなく孤独である。

そのことを私は、人間は 自由の刑に処せられている と表現したい。

というのは、一方で、人間は自分自身をつくったのではないからであり

しかも一面においては、一度世界の中に投げ出されたからには、

人間は、自分の為すことすべてに 責任 があるからである。

◆ **アンガージュマン** (engagement、自己拘束、社会参加)

社会的現実**に拘束**されながら、同時にその現実を作り変えていくという、社会への**参加**をともなった自由というのが、現実的自由である。

我々が、人間が自らを選択するというとき、われわれが意味するのは各人がそれぞれ自分自身を選択するということであるが、しかしまた、**各人は自らを選ぶことによって、全人類を選択するということも意味している。**われわれの責任は、全人類をアンガジェ (engager) するからである。もし私が結婚し、子供を作りたいと望んだとしたら、たとえこの結婚がもっぱら私の情熱なり欲望なりに基づくものであったとしても、私はそれによって、私自身だけでなく、人類全体を一夫一婦制の方向へアンガジェするのである。こうして私は、私自身に対し、そして万人に対して責任を負い、私の選ぶ人間像を作り上げる。**私を選ぶことによって、私は人間を選ぶのである。**

アンガジェ (engager) ……参加する、拘束する、約束する

- ・自由とは、常に「ある状況」の中にあつて抵抗・困難・障害を伴っているものである。
「何の拘束もない」という意味での自由はあり得ない。
↓
自由とは、結局のところ「選択の自由」でしかないのである。
- ・自由な選択をする、ということは、言い換えれば、ある「状況」の中に、あえて自己を縛り付けるということでもある。

※サルトルは、哲学者であると同時に作家でもあった。代表作『嘔吐』
1964年、ノーベル文学賞候補に選ばれるが、その受賞を拒否。

※サルトルは、女性作家のボーボワールと、互いの自立性を尊重した共同生活を営む
(契約結婚)。

◎シモーヌ・ド・ボーボワール (1908-86) ……代表作『第二の性』

「ひと**は**女に生まれるのではない。女**に**作られるのだ。」

※生物学的性 (sex) ⇔ 社会的に作られた性 (ジェンダー、gender)

→男性中心社会を批判、女性解放運動の思想的原点に

※、実存主義をめぐる思想家たち

- ◎ ショーペンハウアー（独、1788-1860） 著書『意志と表象としての世界』
ベルリン大学講師の地位を得るが、ヘーゲル人気に抗することができず辞職。

- ・ 世界の本質は「生存への盲目的意志」であり、
全ての個体もそのあらわれである。

(⇔ ヘーゲルの理性主義の哲学に対抗)

⇓

- ・ 厭世主義（ペシミズム）
盲目的意志に駆られ、満たされない欲望を追い続ける人生は苦痛。
→「生への意志」を否定することによってのみ苦悩から解脱できる。
(↑インド哲学研究の影響)

※「生への盲目的意志」という考え方はニーチェに大きな影響
しかし結論は全く正反対

- ◎ フッサール（独、1859-1938）

▶ 現象学

外界の存在についての思いこみをいったん**判断停止（エポケー）**し
内面の純粹意識に立ち返って、意識の現象をありのままに記述する。
純粹意識から世界が構成されるしくみを解明しようとする。
→マックス・シェラー、ハイデガー、サルトルなどに影響

- ◎ ベルクソン（仏、1859-1941）

→ ホモ・ファーベル

- ▶ 生の哲学……生を持続と変化の相のもとにとらえる。
機械論的生命観・目的論的自然観を排する。
生物進化の原動力は、自己を自ら創造する起爆力である。
= **生命の飛躍（エラン・ヴィタール、élan vital）**

- ◎ メルロ=ポンティ（仏、1908-61）……現象学的身体論、『知覚の現象学』

サルトルと一時期協力

しかし「対自」と「即自」を分ける考え方には反対。

人間の身体は、物体であると同時に「意識が浸透した存在」でもある。
(主体と客体の両面を持つ)

- ◎ カミュ（1913-60、実存主義の作家）

『異邦人』『ペスト』などで“**人生の不条理**”を直視

※**不条理**……世界に意味を見いだそうとする人間の努力は、
最終的に失敗せざるをえない、と主張する思想。

近代の科学的社会観

1. 実証主義 (社会学)

p.134

- ◎ コント (仏、1798-1857) 著書『実証哲学講義』
 - ・ 実証主義の手法……事実の観察で社会を把握→社会法則を確立
→未来を予見→悪しき事態を予防 (人類の進歩へ)
 - ・ 人間精神の3段階
 - ①. 神学的段階 (神の活動のみで説明)
 - ②. 形而上学的段階 (精神的領域のみで説明)
 - ③. 実証的段階 (経験的事実のみで説明)

2. 社会進化論

p.134

- ◎ ハーバート・スペンサー (英、1820-1903)
社会進化論、社会有機体説 → 弱肉強食の資本主義・帝国主義に呼応

3. プラグマティズム

p.161

アメリカ独自の現代思想。1870年、ハーバード大学「形而上学クラブ」創立

- ◎ パーズ (1839-1914) ……「形而上学クラブ」創始者
 - プラグマ ……ギリシア語で“行為・行動” pragma
 - すべての概念の源泉は「行為」にある
 - ex.ある物体が「硬い」という概念は、
「引っ掻いてみる」などという行為があって初めて生ずる

「科学的知識」論として提唱

→のち、人生論・宗教論など広く真理全般に拡大

- ◎ ジェームズ (1842-1910)
真理の基準は“実生活に役立つ”ということ (真理の有用性) にある。

※これがプラグマティズムに対する一般的理解＝「実用主義」

↓

20世紀初頭～30年代にかけて大きな潮流となる

- ◎ デューイ (1859-1952)
道具主義 ……知性は実生活の問題解決に役立つための道具である
そのような知性を創造的知性と呼ぶ
そうやって人類は環境に適応し進化してきた
(プラグマティズム+ダーウィンの進化論)

→ プラグマティズム教育運動＝問題解決学習

一定の考え方や価値観を教え込むのではなく、「為すことによって学ぶ」